第 3 回 SPARC Japan セミナー2011 「学術情報流通の新たな展開 —研究者・学会とオープンアクセス—」

ディスカッション

森 いづみ （国立情報学研究所 学術コンテンツ課専門員）
永井 裕子 （社団法人日本動物学会 事務局長）
轟 眞市 （物質・材料研究機構 主幹研究員）
神崎 浩 （岡山大学附属図書館長）

●永井　まず最初に、それぞれの講演でどうしてもこれだけは言っておきたいということがあればお願いします。森さん、いかがですか。

●森　実は先ほど永井さんに立ち話で伺ったのですが、図書館の方が興味を持たれると思う点についてお尋ねします。永井さんの発表の中で、「Zoological Science」はエンバーゴが終わった後は出版社版を提供しますということでしたが、BioOne を購読していればそこからダウンロードして使っていいし、そうでない場合も出版社版の PDF を提供していただけるということですか。

●永井　ご要望があれば PDF をお送りします。今日は岡山大学の先生方が聞いてくださっていて、「分かっていたけれどもどうしていいか分からない。どうしていいか分からないでいると、毎日のことに埋もれてしまってできていなかった」とおっしゃっていましたので、何かございましたらぜひともお問い合わせください。

神崎館長、岡山大学では本当にマンデートな形で学位論文等のデポジットをお決めになられたのですが、どのようなお考えでということと、このように決まったということの背景を教えていただけますか。

●神崎　4 月に図書館長になりまして、機関リポジトリということは知っていたのですが、実は私自身、研究アクティビティが低くなっているということもあって、それ以上は踏み込むことなく過ごしていたのです。それが部長、課長との話の中で、「機関リポジトリも評価の対象になっているのだけれども、ペイのところでそんなお金がないのですよ」と言われて、「そうですか。そんなに高いんですね」ということで見てみたら、私は学位論文は当然公表されるものだと思っていたのですが、社会系では、公表してはいけないという人がたくさんおられました。

私が、「学位論文は審査されて見られるものだから、自分で取っておいていいものではないでしょう」と言ったら、社会科学系の先生は、それを元に本を書かれるということもあって、公表されては困るのだそうです。「それであれば、本を書いてください。書くまでの時間は短くリミットを切ります。10 年も 20 年もたってから本を出しても駄目でしょう」という感覚が私にはありました。

それと、理系の場合は、それを知財にするということは本当はあり得ません。学位論文は既に知財として公表されているものについてテーマにすべきで、1 年以内には当然公表されるべきものだろうと私は言われてきました。大学の学則にも、学位論文は公表すると書いてあります。それを勘違いしている人が多いということではないかと思います。

ですから、学長が「公表します」と言っていただければいいので、ぜひ公表する方向で話をしてもらうこ

とにしたのと、著者が何らかの理由で公表したくないということであれば、その理由をちゃんと明記してもらうということ。あと、公表の手続きについては図書館側がして、面倒なことはできるだけ取り払うということで、できたらいいと思っています。まだスタートしたところなので、各事務系の方のリアクションも必要なのですが、本当にオープンになるかどうかは先生方のリアクション次第だと思います。

それと、岡山大学で大きなプロジェクトに取り組んでいるときに、各プロジェクトで論文をリストアップされているのですが、それをリポジトリ化すれば、大学としてのアクティビティをもっと皆さんに見てもらえるでしょう。そういう中心的なものについてはリポジトリ化を推進するということも、学長が「やりましょう」と言えばということかと思っています。

●永井　どうもありがとうございます。轟先生のお話にもあったように、轟先生も物質材料系の研究者でいらっしゃるので、上からアウトリーチしろと言われるという話と不可分です。しかも、今までのように新聞に出せばいいというだけではなく、いろいろなところに出せば誰かが見てくれる可能性があるという状況が与えられているので、それに対応しなければいけないという時代になっているのだろうと思います。

生物系の学会にいると、轟先生のような考え方を生物の先生たちが持てるのかと、私はいつも轟先生のパフォーマンスや行動を見ていて悩ましく思っているのです。なぜかというと、物理の先生たちはシステムを作ってこういったことをするのに全く壁がないのですが、分野によっては、先ほどの轟先生のプレゼンにあった山に登る前の階段で、もう駄目という分野もあると思います。

そのときに頼りになるのは図書館の方かと思いますが、そこのところがなかなか打破できません。轟先生の話を聞くと、いつも感心することばかりです。学会の先生に説明しても、論文を発表したところで終わり、どこかのジャーナルに載ることで終わりです。轟先生は、その後、すごくケアされるわけですよね。

難しい質問かもしれませんが、そういうシステムなどを知らない研究者、先生のようにはできない研究者に対して、セルフアーカイビングして、もちろんアウトリーチするということについて、どのようなサジェスチョンをされますか。

●轟　機関リポジトリを既に開設している組織に所属しているなら、ただで使えるものは使おうということですよね。なぜそれが存在しているのかが分からない人もいるようですが、それは研究者の知り合いから言うなり、図書館の方々が PR するなりしていけば良いと思います。

大きな障害になるのは、雑務に追われていて暇がないということです。多分、それが言い訳の一番だと思います。それならば代理で登録することもできるとか、司書と連携するといったことになるでしょう。とにかく敷居を低くする工夫をシステムの方でもするべきだと思いますが、やはり基本は、あなたの論文をこうしたらもっと読まれますよというところが原動力なのです。それが王道なのですが、同業の研究者だけに知られればそれでいいという人が聞く耳を持たないのは、それも道理かなと思います。

でも、これから先、研究費が先細りしますので、兵糧攻め的なことになってくるのではないでしょうか。現在、注目すべき成果を出している人は、そんなことをしなくても誰もが論文を読みたいとやって来るのですが、そうでもない、平均もしくはそれより下の人たちは、自分の存在感を示すために使えるものは使わないと損だという風潮にすべきだと思います。

●永井　IR は非常に有効だと、図書館の人に PR のお願いをしてということですね。

今日の岡山大学の図書館員の方の様子を伺うと、なかなか先生とうまく連携が取れないというか、お気持ちはあるけれども図書館の方もお忙しいし、研究者の方もお忙しいという状況が垣間見えるのですが、今日

はNIIからも森さんがおいでになっています。NIIのサービスも含めて、フロアから何かご質問はありませんでしょうか。

●Q1　香川大学の大園です。森さんにお伺いします。最後の「新たな基盤構築に向けて」のスライドに、統合インデックスの話が出てきました。その中で、著者名寄せやタイトル名寄せの話が出てきたのですが、各機関のリポジトリを構築するに当たって、その辺のところを想定して、何か図書館側でしていった方がいいことはありますか。また、今後、具体的なところで、統合インデックスというものをどのような形でまとめていくのか、今分かる範囲で教えていただければと思います。

●森　機関リポジトリをこれから構築する、ないしは既に構築済みの大学で名寄せにうまく取り入れられるためには、機関リポジトリにメタデータを登録していただくときに、著者IDを入力しておいていただくことをお勧めします。金沢大学が代表機関になっている、CSI委託事業の領域2のプロジェクトで取り組んでいます。2月14日に大阪市立大学でワークショップがありますので、興味のある方はぜひ参加していただきたいと思います。

今のリポジトリのメタデータの弱さは、例えば共著者の1人目が工学部、2人目が理学部、3人目がほかの大学の方という時に、著者と所属をひも付けられないことです。日本で一番よく使われているDSpaceにはそういった機能がありませんでした。しかし、バージョン1.6以降には、著者一人一人にIDをひも付けられる機能が付与されています。それを使っていただくことで、一意に著者を特定できます。

著者IDを入力しておいていただくと、KAKENや、将来的にはCiNii、ORCIDといった国際的な枠組みで進んでいる著者名寄せの話に入っていけると思います。図書館は、先生方に手間をかけないように登録を代行するということだけでなく、メタデータに付加価値を付けることが、プロフェッショナルな部分として重要だと思っています。

二つ目のご質問の方に移りますが、今後のサービス展開を考える際、オープンアクセスやリポジトリなど、図書館の従来の守備範囲の中だけで活動していても、おそらくトータルとして研究者の方に役立つツールにはなりません。購読モデルの電子ジャーナルもあれば、著者版がリポジトリにもある、他のところにも置いてある、そういうものを全部ひっくるめて探せるような環境を作っていかなければならないと感じています。

いろいろな由来のデータが集まってきたときに必ず著者IDで名寄せができて、特定の研究者の論文リストが作れるとか、ある論文の電子ジャーナルの出版社版はこれです、著者版はこれですというものを、インデックスを作って特定できるようにしておくことは、今後のサービスのために非常に重要だと考えています。

これらは今動いている状態なので、各大学で費用対効果の見極めも大事だと思います。とりあえず機関リポジトリに著者IDを入れることは、すぐにできる第一歩だと思います。

●永井　今のことでもう一つ聞いてもいいですか。図書館が少なくとも機関リポジトリベースで著者IDを入れておけば、ORCIDが世界で動いたときに、日本は次へ進むことができますでしょうか。

●森　はい。理想的には、リポジトリに著者IDを入れていただくと、NIIの研究リゾルバーという仕組みに取り込むことができて、その研究者リゾルバーの情報が何らかの形でORCIDにも反映される。という世界が作れれば良いと考えます。ただ、著者の識別子の場合は、コンテンツの識別子で成功したCrossRefのように、すぐに実効性の高い世界標準ができるのは難しいかもしれません。国によって温度差はあるようですが、個人情報の問題等から、著者に背番号を振ることは非常にデリケートなことだと言われています。大学の方でも、差し支えない範囲でご協力いただけると

有難いです。

●永井　分かりました。なぜこう伺ったかというと、とても大きな話になってしまって恐縮なのですが、もともと ORCID の発端は中国や韓国の名前の名寄せだったようなのです。誰がワンさんなのか、誰がキムさんなのか分からないと。私たちにとっても難しいのですが、どうもヨーロッパの人たちは、ORCID に関して、この点で、日本に非常に期待しているようです。それに対して、日本にとってもそれは難しいという以前に、日本はどうなっているのかということが不安で、どう答えればいいのか、きょろきょろしてしまうことが多いのです。

そういう期待感が実は欧米にあるという問題を日本が抱えているということを、案外、日本人は理解していません。しかも、ORCID のプロジェクトに深くかかわっているのは NII だけなので、そこも厳しいと思います。なぜかというと、ヨーロッパやアメリカは学会レベルで ORCID の話があるからです。学会には世界から論文が来るので、どこのワンさんなのか、どこのキムさんなのかがとても重要なのです。

結局、何を考えているかというと、例えばアメリカの物理学会などは、自分たちのコンテンツをより広く届けるために ORCID を使うという話なのです。でも、やはりそのために人までは雇えません。今日の eSciDoc の話を聞いていても、そういったシステムが学会にあったらとは思いますが、またそのための人材を雇うことなどとてもできません。とても難しいのですが、やはり NII に、もちろん今おっしゃったように図書館の方にも、少なくとも本当にベースの部分で非常に地道なことをしていただくことが大事なのだということがよく分かりました。

ただ、ORCID がどういう形で動いていくのか分かりませんが、もしかしたら大きい学会が非常に違う形で動いてくる可能性もあるのではないかとは思っています。

いい質問をしていただいて、ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

●神崎　岡山大学では、学長主導でリサーチ ID を全員登録しなさいということになっていましたが、ほとんどの方は「なぜそんなことするの」という状態で、「自分はメッセージを書いても拒否する」と言う方もおられました。結局、今、リサーチ ID がない状態で検索をしても、自分にとって何が不足しているのかが全く分からないのです。「そんなことをしなくても十分生きていけるではないか」という世界は結構いろいろなところにあって、わざわざそんなことをして自分の情報を発信することに、どんなメリットがあるのかが分からないのです。

図書館では知っている方も当然おられると思いますし、研究者の中で詳しい方もおられるのですが、そういう方が「実際にこうなるのですよ。先生の論文でこうやってみたらこんな結果です。こちらはこんなですよ」と話せればいいのですが、私が大学院で講義をするときに、「君の先生の一番古い論文を見つけてきて、どんなやり方でもいいから検索してみなさい」と言うと、学生が持ってくる答えは全然違います。「何で」「いや、これで十分でしょう」という話で、結局、知らないのです。PubMed で何とかなると思っている学生がいっぱいいる。それで若手がスタートすると、非常に困ったことになります。昔なら何とかして探しなさいと言われましたが、今はそんなことまで言う先生はいませんし、例えば図書館に行って聞きなさいと言っても、図書館検索のために 1 人の人がいるわけではありません。

そういう意味では、日本全体としては、研究費をそちらに持っていくようにして人材のための費用を取らないと、今のところ爆発的な改革をすることは難しいのではないかと思います。先ほど言われていた、非常によく知っている方がおられるとすると、そういう方が図書館に常駐できるような状態がなくては、今の図書館の職員の方がすべて何でもやるというのは難しいと思います。ルーチンワークを外に出して、図書館の

職員の方はある程度専門性を持ったものをもっとできるような世界にしなければいけないというのが、私が図書館にいて思う現状です。図書館の方々は、業務がいっぱいありすぎてとてもそれどころではありません。そういうことをしてもらいたいと思っている人はいて、図書館の方に来ていただいたらできるけれども、メールで「どうぞやってください」と言われても、なかなか教員は動かないのではないかと思います。

●永井　今のお話をお聞きすると、図書館のことをとてもよくご存じの館長先生なのだということがよく分かりますが、結局、テクノロジーが先に行ってしまっていて、あまりにもいろいろなことが追いつかないのです。掌握できる研究者はいらっしゃって、例えば轟先生はできるのですが、NIMS の科学情報室のようなことがかつての国研の研究所でされているかというと、ほとんどされていません。そういうことから考えても、先生が先ほどおっしゃったように、人材がいないということもあると思います。

先ほど阪大の前田さんからも随分積極的な意見が出たのですが、今日の話にかかわらず、普段、図書館で仕事をされていて感じておられるようなことも含めて、何かご発言があればお願いします。せっかく今日はたくさんの大学から図書館員の方がおいでだと思いますので、いかがでしょうか。

小山先生、何かご感想を言っていただけますか。

●小山　日本大学の小山です。今回のテーマは「研究者・学会と」ということで、たくさんの大学の方が、特に大学図書館の方がいらしています。ですから、例えば大学図書館の方と研究者のコミュニケーションの問題が、ある部分では障壁のようになっているのかもしれませんが、今までやってきた中でこういったことがすごく印象的でよかったとか、逆にこういったところが難しかったというお話を、ぜひ聞きたいと思います。全くコメントになっていないのですが、そんなことに興味を持って聞いておりました。

●永井　今のお話はいかがでしょうか。

●森　神崎館長が、岡山大学では、「なぜ学位論文や学内プロジェクトの成果を公開しなければならないか」ということをトップダウンで非常にクリアに説明してくださったと思うのですが、なかなか他の大学では進んでいません。岡山大学では強いリーダーシップがあったと思うのですが、トップダウンの決定をしていただくと図書館の現場もやりやすいというエビデンスになると、良いのかなと思います。

学会の方も研究者の方もおられますので、図書館の仲間内でやっているときとは違うアウェーな状況だと思いますが、本音の話ができたらと思います。その中で、NII として何かお役に立てることがあれば、それを拾って帰りたいと思っています。

●永井　東京では何年もセミナーを続けていますが、このごろやっと皆さんが自由にいろいろなことを言ってくださるようになった気がします。

今日はなるべく肩の力を抜いてとお話ししたのですが、実は私の話は、かなり先鋭な話だったと思うのです。どこかアメリカの学会では行っているかもしれませんし、かつて ACS が、自分たちの論文がどう使われているかという論文を出したようなのですが、それ以外は私も見たことがなくて、それが図書館の方にどう受けるかということもあったので、非常にとがった話をしたのです。

アウェーな感じはこちらにもありますので、ぜひ。どこまでが仲間内かと言えば、本当は学術コミュニケーションにとってはみんな同じところにいるのですが、いかがでしょうか。今日の話を聞いて、帰って先生に対して頑張れるという感じでしょうか。

●小山　私がいろいろなところへ機関リポジトリとは何ぞやという話をしにいくときに、いつも言うことが一つあります。それは、森さんがおっしゃることとも関連するのですが、機関リポジトリは一体誰のために

あるのかということを、ぜひ考えてほしいということです。まず分かりやすいところで、大学のための、大学のショーケースとしてのリポジトリということが考えられるでしょうが、その一方で、研究者個人としては、もちろんそこに参画するのはいいのですが、大学全体という大それたことではなく、先ほど轟さんがおっしゃったように、自分の研究成果をいろいろなところで拾ってもらえる仕掛けとしてのリポジトリという感覚があるのです。

後者の立場に立ってリポジトリに登録するとか、そこに何かを載せるときにどうしてほしいのかというと、例えば私が三重大学にいたときには、図書館に送れば著作権の処理から何から全部してくれました。しかし、図書館の方からは、載せましたという話は一言もなく、自分で検索してみたら出てきたので、載せてくれたことが分かるという状態でした。やってくれたのだという感覚はあるのですが、それなら知らせてほしいと思うのです。

図書館の方々はいろいろなことをしてくださっているので、一言声をかけていただければ、そのときに、例えば「アクセス数がこのぐらい出ている」とか「こういうことをやったら受けました」というような話も出てくるかもしれません。私はそういう経験をしたことがあるので、一言だけお話ししました。

●永井　ありがとうございます。

●神崎　機関リポジトリを岡山大学でやるときに、もちろん大先生がリーダーになっているので、そのリーダーに「プロジェクトを紹介してくださいね」と言った横で、ポスドクの人に「チャンスなので載せておいてもらいなさい」ということは言いました。それを大先生に言うと、「あいつを引き抜かせるのか」という話になるので、そのあたりのタイミングの問題はあるのですが、やはりマンパワーとしてそれぞれの人が役に立たないといけないと思いますし、彼らにとってみれば、普通のジャーナルに載っていることに加えて、ひょっとしたらそれで、このキーとなる技術は彼がやっているかもしれないよねみたいなことがあるかもしれません。理系の世界ではそういうことがあると思うのです。10 人の中でこいつが分かっているのはこれだけというようなことがあるので、そういうこともあるのだよということを、誰が話すかということですよね。

ですから、図書館の方が、たまたま若手の人を知っていたら話してもらえばいいのですが、周りを巻き込まないとなかなか難しい問題があるだろうと思います。また、メールは見ないと言っている学生がたくさんいるので、メールではなく、「電話をかけて、捕まった人には話をしてあげてください」と言うということも一つあるかと思います。

●前田　先ほど先生から、どんなことがよかったのか、その報告が聞きたいというお話があったので、単純に言います。私は研究室に出向いていって、先生に一方的にオープンアクセスの必要性を説いたのです。それが非常によかったことなのですが、先ほど小山先生がおっしゃった、登録できましたという連絡もないというのは、コミュニケーションの能動性を全く感じません。

うちの図書館の副館長の論文をリポジトリに入れて、3 カ月ほどたったときに、近くの研究室に行くついでにと思って、その副館長の 100 近くのコンテンツのログを解析して持っていきました。IP アドレスだけ見せても意味がないので、どこの組織からということを分類して持っていったところ、とても喜んでくれて、「前田君、一緒に阪大の理系の研究科長を回ろう」と言ってくださいました。そして、工学、基礎工学、情報、理、全部入れれば研究者が 600～700 人になる大所帯の研究科長のところへ、「翌年も電子ジャーナルが買えると思うな」というような話をしに行きました。そして副館長に、「前田君、静かな威力というものを身に付けなさい」と言われたのですが、いい経験ができたと思っています。今、各研究科の返事待ちです。

具体的に図書館員が持って帰ってやれることは、たくさんあると思います。

それから、先ほど画面にたくさんのキーワードが並びましたが、全部を覚えてから何かをやろうとしたのでは、間に合わないに決まっています。これをちゃんとやろうという最先端のものを一つ決めてやるだけで、十分ではないでしょうか。そのうちに、洋上に小さな小島がぽつぽつと現れて、その島がだんだんつながって自分の守備範囲が広くなっていって、ほかの人と連携してついには大きな大陸になると、私は素朴に信じています。そういうことをやればいいのではないかと思います。

それから、研究者との距離を縮めるということについて一言だけ言わせていただくと、あるワークショップで、先生との距離を縮めるにはどうしたらいいのか、何かコツがあるかという質問がありました。講師の人たちがひととおりおっしゃったのですが、最後に私がどうしても言いたかったのは、「先生に言いたいことは何もないのか。あなたが言いたいことが、すなわち距離を縮めるツールだ」ということです。このことは、ここに来ている図書館員の人にも言いたいです。

分野によっては、一度論文を発表したらそれから 2 年間、どんなにいい論文を書いても出す場所がないという分野もあります。宗教社会学の場合はそうでした。そういうところで新しく紀要を出したい、けれども紀要を作るのはすごく大変だから、少しでも楽ができないかと阪大の先生に相談されて、今、機関リポジトリをプラットフォームにホストして、それを公開しています。このようなことはいっぱいあります。具体的に図書館員の人がやれることは幾らでもあるのではないかと、聞いていて思いました。

最後に一つだけ聞かせてください。轟先生、「Applied Surface Science」は値段が非常に高いですね。うちで統計を取ったら、Elsevier のビッグディール 2600 タイトルの上から 50 タイトルぐらいのところには、単発買いをしたら 100 万円、200 万円、280 万円というものがいっぱいありました。「Applied Surface Science」もかなり高かったです。そんなところに投稿しないで、別のところに投稿するというわけにはいかないですか。

●轟　言い訳になりますが、これはワークショップのプロシーディングとして出されたものなので、私には選択の余地がなかったのです。

●前田　研究者でもない一事務官が研究者を前にしてこんなことを言うことなど、従来は許されようもなかったのですが、こういうことを言えるから、研究者訪問をして直接のコミュニケーションを取ることが楽しいのです。後で部長や図書館長に、「俺にジャーナルに投稿するなと言ってきたぞ」とか、「『Nature Communications』も読むのをやめろと言っていたぞ」と、ひどい苦情が来るのですが、そうしているうちに、ほかの事務では絶対に立ち入ることのできない領域が、ライブラリアンにはまだ手つかずのままで残っていることが分かってきます。最初は今、私が言っていることの意味が分からないかもしれませんが、そこに入っていって経験してもらうことだと思います。先ほどのビッグディールのことも、日本の学会出版のことも、調べていくと全部後ろでつながっていることが分かるようになるので、そこまで行ったら、あとは仕事と言わず、楽しいことになってくると思います。私自身がそうでした。

●永井　どうもありがとうございます。本当はここから議論なのだろうと思うのですが、SPARC セミナーではいつも、最初は皆さん本当におしとやかで、議論が盛り上がりかけたところでやめなければいけなくて、なかなか難しいところです。

今日は岡山大学でこういうセミナーを開かせていただいて、私も大変勉強になりました。ありがとうございました。